

## 河合昭男先生のご逝去を悼んで

芳賀 正憲

情報システム学の確立に哲学との関係からご尽力いただいていた河合昭男先生が、8月6日急逝されました。なぜこんなに早くと、残念な思いが尽きません。

情報システム学の体系の中でも中核となるモデリングの概念について、西欧では、ギリシャ時代以来の哲学がベースになって発展してきていると、かねてから河合先生は語られていました。

そこで、哲学と情報システムの関係を順序立てて、学会関係者の共通認識となるように説明していただくと、学会にとっても情報システム産業の発展にとっても資するところが大きいのではないかと考え、2010年の第6回全国大会の席で河合先生にメルマガへのご寄稿をお願いし、翌年1月から「オブジェクト指向と哲学」の表題で連載を開始していただきました。

第1回には、情報システム教育者としての河合先生の哲学への思いが凝縮して書かれています。今月号に再掲されていますので、皆様にもあらためて読んでいただきたいと思えます。

第2回と第3回で河合先生は、“情報”の基本概念、アイデアと形相について、とり上げられました。

第2回ではまた、アイデア論とオブジェクト指向の関係が、ソフトウェアを仕事にしている人たちの間で常識なのか、UMLを提唱したブーチ氏に、河合先生が直接尋ねられたエピソードを紹介されています。

ブーチ氏から、「それは当然そうだ」と言われ、西欧ではギリシャ哲学がコンピュータ以前のリテラシーになっているのだと感じられたとのことでした。わが国との大きなちがいです。

2012年には、学習パターン、パターン言語について、7回にわたって連載されています。組織や個人の経験や試行錯誤を通して蓄積されてきた暗黙知を、新たな形式知として創出するパターン言語は、人間中心の情報システムの優れた実現モデルとして今日情報システム学を確立する上で大きなテーマになっています。河合先生には、きわめて早い段階で、その重要性を指摘していただきました。

河合先生には8年間にわたり、実に91回のご寄稿をいただきました。学界と産業界、双方が、情報システムを基本的なところから考えていくための指針となる、大変に価値の高いアーカイブが完成したと思えます。

情報システム学会に対する河合先生の長年にわたるご貢献に感謝申し上げるとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。